

**早稲田大学ふくしま広野未来創造リサーチセンター**  
**第4回ふくしま浜通り文化育成と発信事業ワーキンググループ会合**  
**議事録**

日時：2020年1月16日 10:40～15:00

場所：早稲田大学早稲田キャンパス 19号館 713会議室

記録：朱 鈺

**出席者（敬称略）：**

|        |  |
|--------|--|
| 安部 良   | 安部良アトリエ一級建築士事務所<br>明治大学工学部建築学科兼任講師               |
| 松岡 俊二  | 早稲田大学ふくしま広野未来創造リサーチセンター長<br>早稲田大学大学院アジア太平洋研究科・教授 |
| 藤岡 聡子  | 福祉環境設計士、株式会社 Redo 代表取締役                          |
| 山本 麻紀子 | アーティスト   |
| 藤城 光   | アーティスト、「PRAY+LIFE」代表                             |
| 森野 晋次  | 現代美術家、気流部代表                                      |
| 永井 祐二  | 早稲田大学環境総合研究センター・研究院准教授                           |
| 中嶋 聖雄  | 早稲田大学大学院アジア太平洋研究科・教授                             |
| 畑 まりあ  | TURN プロジェクトアーツカウンシル東京・事業推進室事業調整課事業調整係            |

**事務局**

|             |                         |
|-------------|-------------------------|
| 中野 健太郎      | 早稲田大学大学院環境エネルギー研究科・博士課程 |
| CHOI Yunhee | 早稲田大学大学院アジア太平洋研究科・博士課程  |
| 山田 美香       | 早稲田大学大学院アジア太平洋研究科・博士課程  |
| 朱 鈺         | 早稲田大学大学院アジア太平洋研究科・博士課程  |

**オブザーバー**

|       |                        |
|-------|------------------------|
| 山口 知  | 安部良アトリエ一級建築士事務所・アシスタント |
| 岡 啓輔  | 一級建築士                  |
| 中村 研一 | 東京藝術大学・油画助手            |

**プログラム**

|             |  |
|-------------|--|
| 10:40~10:50 | 司 会：安部 良（安部良アトリエ一級建築士事務所、明治大学兼任講師）<br>開会挨拶：松岡俊二（早稲田大学ふくしま広野未来創造リサーチセンター長、<br>早稲田大学大学院アジア太平洋研究科・教授） |
| 10:50~11:50 | 報告1：藤岡聡子（福祉環境設計士、株式会社 Redo 代表取締役）<br>「ケアの文化拠点のつくり方」  |
| 11:50~12:50 | 報告2：山本麻紀子（アーティスト）<br>「ノガミッツプロジェクトについて」   |
| 12:50~13:50 | 昼食および第5回ふくしま学（楽）会に関する意見交換  |
| 13:50~14:50 | 総合討論   |
| 14:50~15:00 | まとめ、今後の予定など  |
| 15:00       | 終了   |

## 開会挨拶

### 松岡俊二

- ・早稲田大学ふくしま広野未来創造リサーチセンターは、2017年5月に福島県広野町公民館で設立総会を開催した。早稲田大学をはじめとした研究者と地域の方々が協働し、福島復興と持続可能な地域づくりについて、広域的かつ長期的視点から調査研究活動を行っている。2018年1月から、本リサーチセンターは「ふくしま学（楽）会」という分野・地域・世代を超えた議論の場を設けるようにした。2019年1月に開催した第3回ふくしま学（楽）会において、原子力産業に頼らない自律的な福島県浜通りの地域社会の将来像を示すため、2050年を目標とする「ふくしま浜通り社会イノベーション・イニシアティブ（SI構想）」を提案した。以下の3点がSI構想の柱である。
  - ① エネルギー産業遺産・原発事故遺産（1F）・震災復興施設のネットワーク
  - ② 地域の新たな魅力や価値を創造する地域アートの展開
  - ③ エネルギーと復興を学び・体験する農泊や渚泊など組み合わせた広域DMO（地域経営体）の創設
- ・ふくしま浜通り文化育成と発信事業ワーキンググループ（以下、WG）は第2の柱の取り組みとして、浜通り地域における地域アートの展開について議論する会合である。今後は、これまでのSI構想の具体化に関する検討を通じて、3本柱の集約として「ふくしま浜通り国際芸術・学術（Arts & Sciences）拠点構想」を提案したいと考えている。

### 安部 良

- ・本WGは、2019年5月に開催したふくしま浜通り芸術祭準備懇談会をベースにしている会合であり、それ以降、福島浜通り地域でどのように地域アートを展開するかについてこれまで3回のWGを重ねてきた。3回のWGを通して、従来の大型芸術祭の限界を見据えながら、現在地域固有の魅力と価値を見出していく、人に寄り添うような地域アートという方向性で議論を進めている。
- ・本日は、京都で高齢者施設を舞台にアートプロジェクトを実施している山本麻紀子さんと、福祉環境設計士として医療介護とアートを結合し、ケアの文化拠点づくりに取り組んでいる藤岡聡子さんを講師にお招きした。本日の講演により、福島における地域アートの展開に有益な示唆を与えられることを期待する。

## 報告1 藤岡聡子

### 「ケアの文化拠点のつくり方」

- ・生涯を終えることは悲しいというだけでなく、その人の持っている貴重な経験・知識を残すことが重要であると考えている。しかし、老人ホームには高齢者しかいないため、高齢者の知識や経験が受け継がれていけず、人生の思い出も残せない。そこで、「なぜ老人ホームには老人しかいないのだろうか？」という問いを設定し、様々な人に老人ホームに来てもらうように動き始めた。
- ・2017年には高齢者の知識を活用した「長崎二丁目家庭料理教室」というプロジェクトを実施した。この活動により、この施設が高齢者の知識のみならず、地域社会にある様々な知識が会う交流拠点となった。長崎二丁目家庭料理教室の経験を踏まえ、2019年9月に軽井沢でほっちのロッヂプロジェクトを開始した。
- ・「ほっちのロッヂ」プロジェクトは、訪問看護ステーション、診療所、病児保育室、デイサービスを主な事業内容としている。医療法人社団オレンジが運営し、株式会社 ReDo がプロデュースを担当している。
- ・ほっちのロッヂは症状によって介護対象者を定義する伝統的な介護とは違い、「症状や状態、年齢じゃなくて、好きなことをする仲間として出会おう」ということをコンセプトとし、人々が会う場を作

ることを図っている。このコンセプトに基づき、ケアの文化拠点を形成するため、以下の理念を拠点づくりに組み込んでいる。

- ▶ 在宅医療拠点：家で介護を受けることを選んだ人たちの自宅を訪問し、これを機にその人の生活文化を感じ、生活文化の次世代の担い手と出会う機会を作る。
- ▶ 〇〇状態の A さん→「とおかんや」を仕切ってきた佐藤さん：医学上の症状ではなく、生活文化でその人を理解する。
- ▶ 誰かの得意と誰かの苦手が出会う場所：出会うことにより人々の可能性と創造性を引き出す。
- ▶ 子供の目の前で展開されるケア：周辺の中小学校や幼稚園の子供たちが自然に来られるようにし、子供の目の前で高齢者介護を行う。これにより、世代間交流が促され、施設で働く人にとっても良い刺激になる。
- ▶ 働く人も、通う人も、双方の人の流れがある場：「介護」と「介護される」という間の壁をなくし、人の流れを活性化し、ケアの連鎖を作っていく。

- ・ほっちのロッヂは医療看護の他に、町全体のコミュニティづくりにも取り組んでいる。事業開始前から、ほっちのロッヂは町の人に出会う活動として、ほっちのお茶会を月に 1 回開催してきた。お茶会での交流を通じて、地域住民が自分とは関係がなさそうな介護と自分との関係性を発見し、事業開始後にほっちのロッヂへ気軽に来てもらおう雰囲気をつくることができた。
- ・資金面では、2019 年 2 月から 3 月までクラウドファンディングを通して 306 名の「ほっちのロッヂャー」を集め、420 万円調達できた。306 名の「ほっちのロッヂャー」にはほっちのロッヂャーカードを配ったり、最近の活動を報告する会報誌を送付したりして、仲間や福祉の関係人口を増やそうとしている。
- ・働き手について、看護師を医療福祉のクリエイティブ職とし、看護師の人の強みを引き出そうとするケアの姿勢や好奇心と問い続ける勇気を重視し、働き手の表現の場づくりも工夫している。
- ・介護側と介護される側との壁をなくす手段の一つとして、アートイベントがあげられる。アート活動を通じて、介護側の人と介護される側の人アート作品の創作に熱中・没頭し、各自の得意なことを教えあい、お互いに創造性を引き出す。介護する人が介護される人に世話されるという関係性の逆転がアート活動の一つの効果であると考えている。

## 【質疑応答】

松岡：プロジェクトの予算はどのようにしているのか？

藤岡：医療関係のプロジェクトなので、医療法人社団オレンジが融資を受ける。また、クラウドファンディングなどを通して資金を調達した。なお、本プロジェクトは医療介護が事業内容であるため、医療・介護保険制度を通じた収益構造になっている。

松岡：運営者の医療法人社団オレンジは病院のような基盤事業を持っているか。

藤岡：はい。医療法人社団オレンジは福井県に拠点があり、2015 年から呼吸器など医療機器などをつけた医療的ケア児が夏に 1 ヶ月避暑地の軽井沢で滞在するプロジェクトを 5 年間実施してきた。

山本：高齢者にどのように発信するのか。

藤岡：チラシやパンフレットなど、主に紙媒体で発信する。また、区長さんに許可をもらい、回覧板を地域で回す。自分も地域の高齢者がよく行く場所に実際に行き、みんなと仲良くする。

中嶋：行政との協力もあると思うが、その際に難しいと感じたことは何か。

藤岡：我々は町の行政という大きな枠で付き合うのではなく、役場職員と個人レベルでも丁寧につき合っている。また、軽井沢町はやはり観光産業のほうを重視し、保健福祉の予算が限られているため、自力で努力しながら、行政とフラットな関係性を目指している。

松岡：会社設立には行政の許認可が必要であるが、ほっちのロッヂは主に県の行政か、町の行政か。

藤岡：施設の建設・使用などの開発事業は町から許認可が必要であり、介護事業は県から指定を受けてい

る。また、軽井沢町の独特なルールとして、環境課との事前協議のうえ修了証をもらわないと確認申請が取れないのである。

**森野:**介護サービス利用者の家族とはどう付き合うのか。

**藤岡:**付き合い方はケースバイケースである。現在は、施設の送迎の代わりに、利用者が一人暮らしの場合は近くの人に送ってもらい、家族がいる場合、家族に送ってもらえる関係を作ろうと考えている。このようにすることで、利用者の近くの知り合いや家族の強みを生かし、介護に巻き込める。我々は業者として確かにサービスを提供する立場であるが、訪問診療・看護でも通所介護でも、どのように利用者本人が望む環境を作るのかは家族の協力が不可欠であり、それについては家族とのコミュニケーションがチャレンジングである。

## 報告 2 山本麻紀子

### 「ノガミッツプロジェクトについて」

- ・2018年、京都市による「文化芸術による共生社会実現のための基盤づくり事業」のモデル事業として、総合福祉施設である東九条のぞみの園（京都市南区）を中心に、施設利用者・入居者・施設職員・地域住民とともに協働で「ノガミッツプロジェクト」というアートプロジェクトを実施した。本プロジェクトのステージである東九条のぞみの園は、1995年に設立された特別養護老人ホームである。プロジェクトの企画・制作は、東山アーティスト・プレシメント・サービス（HAPS）が担当し、アーティストの報告者は施設を訪問し、アート活動を展開する。
- ・プロジェクトで着目したのは、施設の真ん中に位置する、あまり使われていない中庭である。作庭全体のコンセプトとして、地域の方々からのおすそわけ植物を中心に造園することにした。報告者は、東九条に引っ越してきたばかりのころに、おすそわけ植物をもらったことを思い出し、おすそわけ植物から人と人とのつながりが生まれたということを経験している。その経験をプロジェクトでも共有しようと考え、周辺地域住民に、のぞみの園へのおすそわけ植物の持ち込みを呼びかけた。その結果、人々の思いを込めた多くのおすそわけ植物を集めることができた。また、施設の職員からの希望で、中庭の日当たりのいい場所に土壌を改良し、畑を作った。「のぞみの園（のぞみのぞの）」には「の」が3つあることから「ノガミッツ」と名付け、中庭はノガミッツガーデンと呼ばれることとなった。
- ・2019年2月、プロジェクト（ノガミッツガーデン&施設利用者との対話をベースにした作品制作）の展覧会「いつかの話 あの人の風」を開催し、展示作品の一つはハンカチであった。ハンカチ作成のモチーフは6名の入居者との対話に出た昔話や人生の思い出であり、報告者がそれをハンカチに刺繍を施した。縫い糸は東九条の近くで採集した植物から染色したもので、結果的に80種の染め糸を作った。染め糸にあえて定着剤を使わず、生きているように色があせたり、変わったりするようにした。
- ・他には粘土の小さなオブジェがある。展覧会会場では、そのオブジェをひとりひとりに手渡した時の写真、そしてそのオブジェが埋まっている植木鉢を展示した。展覧会終了後に、報告者は入居者と一緒に、粘土のオブジェを庭の土に埋め、地域の方からのおすそわけ植物が運んでくるたくさんの物語とともに、今を生きている様々な生命と共鳴し、場の力となるような願いをこめた。入居者たちには、小さなオブジェとなった自分の人生の結晶をノガミッツガーデンに埋める時、それがゆっくり変化していく未来について思い描いてほしいと考えた。
- ・2019年度から、京都市主催事業期間が終わったため、ノガミッツプロジェクトは京都市とHAPSと離れ、東九条のぞみの園の独自事業として継続することになった。ノガミッツプロジェクトを通して、のぞみの園は周辺地域とのつながりが深まった。ノガミッツガーデンの畑で収穫した野菜を地域におすそわけをしたり、施設職員と地域住民や児童館の子供たち・中学生と一緒にタペストリーを作成したり、毎週地域住民が参加するイベントを開いたりしている。また、地域外との交流活動も始めている。

## 【質疑応答】

森野: 作品のモチーフになった6名以外の入居者とはどのように関わっているのか。

山本: 他の入居者さんとも声をかけたり、話をしたりしている。最初は人見知りであり話してくれない入居者さんもいたが、2年目になると親しんできて、多く話してくれるようになった。

藤城: ハンカチを入居者さんに渡した時、何か印象深いことがあったか。

山本: 全員印象深かった。私は入居者さんからたくさんのもをもらったため、ハンカチをお返しできてよかったと思った。

## 総合討論

安部: 福島浜通り地域で地域アートを展開する際に、報告された2つの先進事例から参考になれる点は何か。

藤岡: 医療福祉の現場では、介護する人と介護される人との間の媒介が重要である。専門的な医療知識に基づいた介護は確かに必要であるが、介護される人の症状以外の人間的な部分を引き出すことも重要である。

安部: 介護する人でも介護される人でもない第三者が現場に行き、第三者の目で取り組みの効果や成果をレポートできれば、そのための予算を出してもいいと思う。

山本: 私のプロジェクトの場合、2年目は1年目より事業規模が縮小したが、実際にすることは倍以上になった。

安部: ノガミツプロジェクトの例で言えば、アーティストという第三者を通して福祉施設が文化活動の場となり、文化発信拠点となっている。このような成果を裏付けとして、文化活動のための予算をよりもらえるかもしれない。

山本: プロジェクトの成果報告会で、聴衆から活動の目的は何か、作業療法士の役割との違いは何かなどの質問があった。その時うまく答えられなかったが、今考えてみると、対話をしているその場だけでなく、人々の相互作用が生じる場を作り出すことが第三者としての役割だと思う。

安部: 現場にいない人とは現場で感じることを共有しにくいのが、アーティストのような発信能力を持っている第三者を通して、より多くの外部の人々に波及し、共感を引き起こすことが出来る。

山本: ノガミツプロジェクトは展覧会を実施し、ハンカチなどの作品を展示することで、プロジェクトの成果を発信した。

安部: ほっちノロッヂではどのような形式で発信したのか。

藤岡: 展覧会は開かないが、ほっちのロッヂは高齢者の持っている生活文化を地域の大切な資源として捉え、その生活文化が継がれるため、発信の形式がそれぞれ違ってくる。1対1かもしれないし、大人数の形もありうる。

安部: ほっちのロッヂの場合、わざわざ東京に情報発信するより、町の住民や介護利用者の家族という近隣社会との共有のほうが重要であろう。

藤岡: はい。地方では歩いて来られる程度の距離が重要である。

安部: 共有する人数を増やすことについて、TURNプロジェクトはどう思っているのか。

畑: 福祉施設における第三者の価値は、一般の人々にとって確かにイメージが付きにくい部分があるが、第三者のアーティストと施設利用者との相互作用のプロセスによりでき上がった作品を展示すれば、より広範な人にその価値を理解してもらえらるだろう。もちろん、形式は展覧会とは限らない。

藤岡: 専門職の人はよく科学的、理性的なアプローチで考えていくが、アーティストや作家の参加により、見落とす可能性のある科学以外の面が補われる。

松岡: 近代科学は基本的に還元主義であり、分析しやすいように研究対象を細分化する。それは科学が今日まで進んできた要因であるが、物ごとの全体像を見失うこともある。アートとサイエンスは本来

切り離せないものであり、両者をどのように再び結合させるのがこれからの 21 世紀・22 世紀の課題であろう。科学技術だけではすでにイノベーションを生まれにくく、アートや文化などの直感的・感性的な視点も必要になっている。もし、文化・芸術・学術・教育がリンクできたら、地域全体は文化の側面も含めて、より豊かになるのではないかと考える。

**安部:** どういう方式で関係人数を増やすのかについて、ノガミツプロジェクトではおすそわけ植物により人々のつながりを生み出した。また、ほっちのロッヂでは、「ロッヂャー」を募集することで関係人数を増やしている。ロッヂャーの仕組みを説明していただきたい。

**藤岡:** ロッヂャーは 9 割が町外のため、一人ひとりをどう呼びかけるのが課題である。現在は、ロッヂャーの個人番号を発行したり、ほっちのロッヂで使えるランチ券を提供したりして、軽井沢町に来てくださいと呼びかけている。また、この 1 年間、月 1 回インターネットでのチャンネルを運営し、毎回 50 か 60 人が視聴している。このように、ロッヂャーたちに自分の役割を感じさせるしかけが必要であると思う。

**森野:** クラウドファンディングの返礼品は何か。

**藤岡:** 一番大きいのは木の名付け権である。目的が仲間づくりのため、軽井沢町に来ないと提供しないことを返礼として用意する。

**安部:** 山本さんは多くの人々に展覧会に来てもらえるために、どのような工夫をしたのか。

**山本:** 私は事前にチラシなどを投函して、展覧会やイベントの開催を告知する。例えば、プロジェクトに参加してもらうという意味では、私は参加・不参加の判断をその人に任せられるような形式をとっている。以前自分がイギリスで実施した落し物のプロジェクトでは、あるオルタナティブスペースを運営する人からこの場所と人をつなぐようなプロジェクトをやってくださいという依頼を受け、郵便局の不在通知にそっくりなハガキを投函し、ハガキに「あなたの落とし物を預かっているので、このはがきを持って記載されている日時に落とし物管理所までお越し下さい」と書いた。その結果、たくさんの方が本当にハガキを持って指定場所に来た。その場所で起こった出来事を映像作品にした。このような形で多くの人々にプロジェクトに関わってもらった。

**藤岡:** 介護職は実はクリエイティブな職業である。例えば、認知症の患者を介護するために、実際の状況を踏まえ、いろいろな工夫をしなければならない。そういう意味で、介護もアートでもあり、介護のスタッフたちにも自分の仕事の創造性に気づいてもらいたい。

**松岡:** ノガミツプロジェクトは、京都市の「文化芸術による共生社会実現のための基盤づくり事業」のモデル事業であるが、「共生社会」の実現には文化芸術の他に、経済や教育など様々な側面も存在する。その様々な側面の中で注目された文化芸術による共生社会とは何かについて、山本さんはアーティストとしてどう理解しているのか。

**山本:** 文化芸術による地域課題解決はよく言われているが、人々の暮らしによりフォーカスするところから始めることを大切にしている。暮らしの中の出会いをきっかけに、アーティストが新しい考え方やアイデアを創造していく。

**松岡:** 山本さんのプロジェクトはプロデューサーがいるか。

**山本:** いない。

**松岡:** 良いプロデューサーがいたら、より展開するかもしれない。

**安部:** 森野さんは現在、福島浜通り地域の現場でアートプロジェクトを実施している。現場での地域アートの展開についてご意見をお聞きしたい。

**森野:** 福島県浜通りは廃炉などの作業員が多く、やはり地域住民とは違う気質を持っている。もし作業員たちにも関わってもらうことができれば、さらにおもしろい展開になると思う。

**藤城:** 自分の浜通り地域でのアート活動の経験から言うと、作品を発表するか否かというより、人と人が出会う瞬間にアートが生まれる。そのプロセスのほうが重要であるように思う。

**山本:**今回、京都市の文化芸術による共生社会づくり事業の成果報告書でも、HAPS のディレクターの遠藤水城さんがアートの意味の捉え直しを主張し、「人と人が話を交わす場ではお互いが受容体ようになって、あるいは発信体となって、そこで行われる特殊なコミュニケーションのことをアートと呼ぶ」と言っている。

**中嶋:**本 WG のような、研究・教育機関との共同の際に、アーティストの方々は、何を望むのか。例えば、アートプロジェクトを継続するための資金的な援助なのか、あるいは発表の場を提供すること自体が重要なのか、その両方なのか。

**山本:**例えば、写真撮影や成果を取りまとめる記録役が重要である。また、研究者に専門的・客観的な目線でアートが社会にとって持つ意味と価値を分析してくれたらありがたい。

**畑:**経済面について、福祉施設の文化専門の職員として働くのはいかがだろうか。

**山本:**施設職員となって給料をもらうのは確かにより安定的であるが、やはり新しい場所でチャレンジし続けていきたいため、常に同じ場所にいることで様々な部分で制限されてしまいそうに思うので、施設の職員にはなりにくい。

**松岡:**今回は本年度の最終回の WG 会合である。次回の WG 会合は、今年度の WG の成果を踏まえて、今後どのような場の形式が良いのかも含めて検討し、2020年の4月以降に再開したいと考えている。

以上